大入杵命墓整備工事に伴う事前調査

大入杵命墓（以下「本地」とする）と陪冢亀塚の整備工事に先だち八月二日から九日まで事前調査を行った。工事箇所は本地が①境界線見切取設箇所②排水桝及び樋管取設箇所③石積積み直し箇所④濠内（ヘドロ浚渫箇所）亀塚側が⑤参道石積積み直し箇所で、調査のためにトレンチを第1から第11までの11本設定し発掘を行った。トレンチ番号は工事箇所の①が第2、②が第3、③が第3・第8・第11④が第4～7・9・10、⑤が第1である。第3トレンチは②と③を兼ている。

基本的な層序

Ⅰ層　表土。黒褐色の腐植土。

Ⅱ層　本地墳丘裾に崩落したと考えられる黄灰色土。崩落した葺石とみられる礫が多く混入している。

Ⅲ層　アスファルト舗装前の旧地表と考えられる黒色土あるいは黒灰色土。

Ⅳ層　整地のための客土層。

Ⅴ層　濠内堆積土。

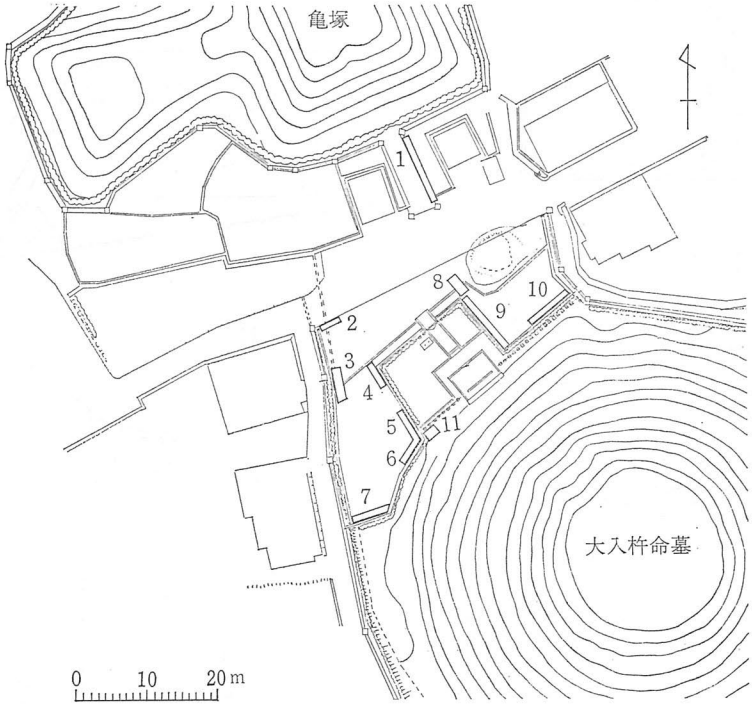
Ⅵ層　本地現濠構築前の旧地表面。畑や樹林地の表土と考えられる。

Ⅶ層　硬い砂質の地山。

各トレンチの概況を述べる。

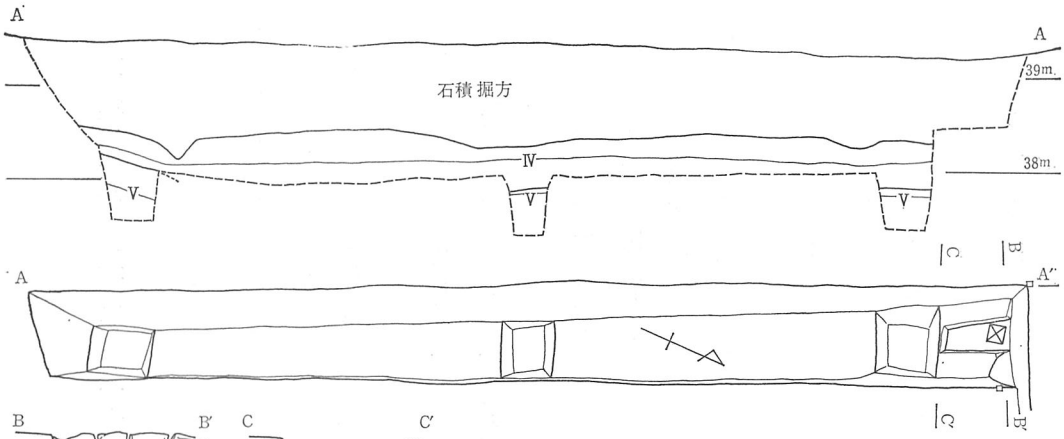
第1トレンチ（第2図1）

亀塚参道東側石積箇所を現地表下二メートルまで掘り下げたところ、石積掘方の下は大きく二層に分けられた。

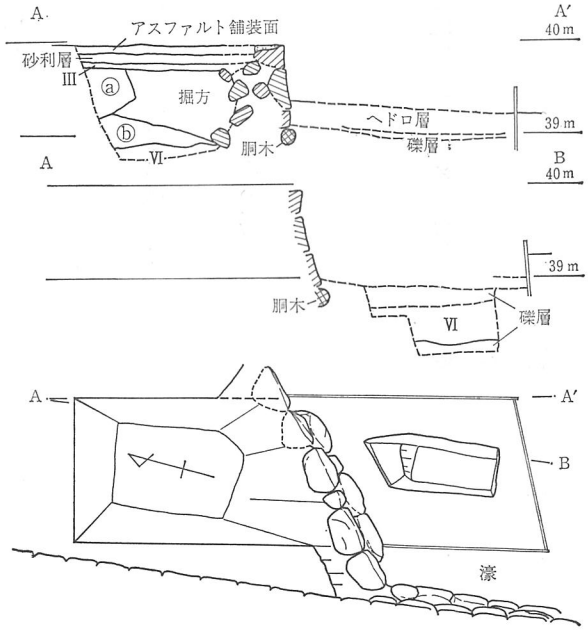


第1図　大入杵命墓・陪冢亀塚調査箇所の位置

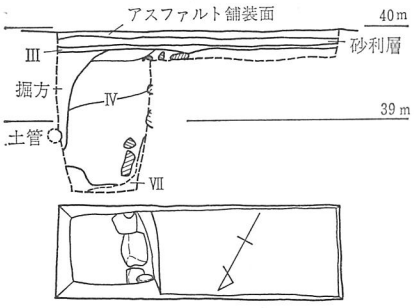
1. 第1トレンチ



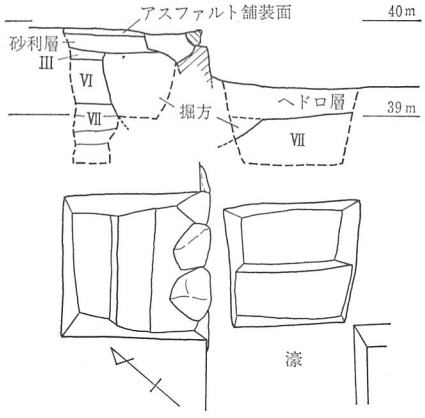
3 第3トレンチ



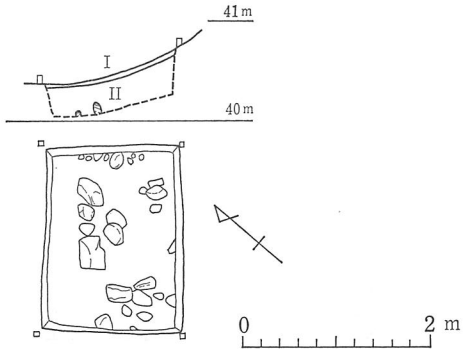
2 第2トレンチ



4 第8トレンチ



5 第11トレンチ



第2図　大入杵命墓・陪冢亀塚トレンチ平面および断面（1/80）

この場所は亀塚の周濠内に位置しており、周濠内堆積土と思われる湿気の強い黒色土と黄土色砂層（Ⅴ層）の上に参道構築のために客土されたと考えられる混入物（砂ブロック・砂利・樹木片など）の多い黒褐色土や黒色土（Ⅵ層）がのっている。地山は検出していないがボーリングステッキによりⅤ層の下約〇・四五メートルで硬い層に当ることが確認された。また、南側（本地側）に向って各層が緩く上っている。これらのことからみて周濠の底及び法面が近いと推測される。

第2・3・8トレンチ（第2図2～4）

アスファルト・基礎の砂利層・舗装前の旧地表（Ⅲ層）までは共通しているので、その下の状況について各トレンチごとに述べる。

第2トレンチは東側の一部を深掘りした。現地表下約一メートルの深さで、地山（Ⅶ層）を掘り込んで作られた段積みの石列（石積の最下段の可能性もある）が検出されたが既に崩壊しており何の目的で作られたのかは全く分らない。この上には石列を埋めるかのように黒灰色粘質砂層と黄色砂混入黒灰色砂層（ともにⅣ層）がのっている。Ⅳ層は在来排水管の掘方で切られている。

第3トレンチは濠の内外に渡って掘削した。濠内ではヘドロ層の下に現濠底に敷いた礫があり、その下に旧地表と思われる有機物を含む黒色砂質粘層（Ⅵ層）が確認された。この下では、また礫が一層を成している。濠外ではⅥ層の上に灰色粘質砂層（ⓑ層）がのっているが旧地表か客土なのか判然としない。これらⅥ層とⓑ層を石積掘方が切り、さらに石積掘方からⓑ層にかけて何らかの掘込み（灰褐色粘質砂層、ⓐ層とする）が切っている。

第8トレンチも濠の内外に渡っている。濠内はヘドロの下にやや硬めの黄灰色砂層（Ⅶ層）がある。かなり厚い層で、混入物もなく地山と考えられる。濠外では現濠構築前の旧地表と考えられる柔らかい黒色土（Ⅵ層）を境にして、その下は色調の異なる硬い砂層が続く。混入物も見られず地山（Ⅶ層）と考えられる。

第4～7・9・10トレンチ

濠内を平均〇・三メートル掘り下げたがヘドロ層内に止まった。

第11トレンチ（第2図5）

現墳丘裾を平均〇・四メートルまで掘り下げたが表土（Ⅰ層）の下には崩落堆積土と考えられる黄灰色土（Ⅱ層）だけが確認された。土中には崩落した葺石と思われる礫が多く混入しており。礫の間には幾つかの出土遺物もあった。

以上の結果、工事に支障となる遺構は検出されなかったが、各トレンチで少量ながら出土遺物があった。

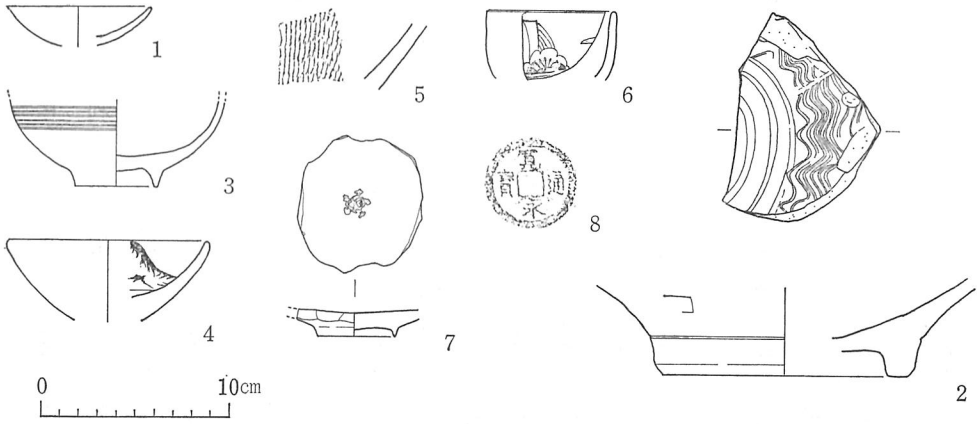
出土遺物は第1トレンチで陶器一点、瓦二点、第2トレンチで土師器一点、陶器一点、磁器三点、原形不明石製品一点、第3トレンチで陶器三点、第11トレンチで土師質土器一点、磁器七点、銅銭一点、原形不明の銅製品と鉄製品各一点であった。主な遺物について述べる。

土師器（第3図1）

第2トレンチⅣ層出土。復元口径七・八センチの灯明皿。

陶器（第3図2～5）

2は第1トレンチ石積中出土。唐津の大鉢。外面には篦痕が見られる。素地は茶褐色で内面には白土を用いた重円文（あるいは渦巻文か）と波状文が刷毛塗りされている。部分的に自然釉もかかっている。一七世紀後半から一八世紀前半。3・4は第3トレンチ石積掘方出土。3は唐津の碗。高台は低く、胴部は丸味をもって立ち上がる。須恵質の素地には内外面とも釉がかけられ緑がかった灰色を呈する。施釉の前に胴部に櫛状工具によると思われる沈線文様が施こされている。一八世紀前半。4は九州産の碗。復元口径一一センチ。僅に内彎しながら逆「ハの字」に開く。内面は底を除いて施釉されており、鉄釉による文様も見られる。釉は黄白色を呈し、表面に細かい貫入が入る。一七世紀後半から一八世紀前半。5は第2トレンチ出土の擂鉢。卸目は細く、一回引くごとに端をだぶらせている。暗茶



第3図　大入杵命墓・陪冢亀塚の出土品（1/4，8は1/2）

第4図　大入杵命墓墳頂所在五輪塔・石仏拓影（1/6）

色を呈する。

磁器（第3図6・7）

6は第11トレンチⅡ層出土。肥前産の染付碗。復元口径六・九センチ。底部は丸味を有し、胴部から口縁にかけては垂直に立上る。図柄は梅の花と思われる。口唇部には褐色の顔料が塗られている。7は第2トレンチⅣ層出土。肥前産の皿。低く薄い高台を有し、内面中央には所謂「コンニャク印判」が施こされている。6・7ともに一八世紀。

銅銭（第3図8）

第11トレンチⅡ層出土。直径二・三センチの寛永通宝。

今回の調査の出土品については東京国立博物館伊藤嘉章氏に御教示を得たものがある。

なお、本地墳頂には風化している簡素な浮き彫りの石仏一体と五輪塔一基がある。参考までに第4図に拓影を掲げておく。

（佐藤利秀）

狭木之寺間陵整備工事区域の調査

奈良市の北郊には、丘陵南部を中心に多くの古墳が知られている。そのなかでも、佐紀古墳群または佐紀盾列古墳群と呼ばれる古墳群は、大型の前方後円墳を中心とする点で、他と区別される存在である。垂仁天皇皇后日葉酢媛命の狭木之寺間陵も本古墳群の西群中の代表的な前方後円墳である。本陵の外堤の大部分は、昭和六十年度に事前の発掘調査とともに護岸工事を実施したが、墳丘部側も経年の波浪による浸食が著しく、随所でガマ状の地形を呈している。ちなみに、第5図に示した陵墓地形図は大正十五年に測量したものであるが、今回、外堤部分に位置する境界標を起点に部分的に再測量を行ったところ、大正十五年時に比して、墳丘裾が六〇～八〇センチ後退していることが確認された。そこで、今回、この部分を主に整備工事をおこなうこととなり、平成二年十二月十三日から二十六日にかけて事前発掘調査を実施した。この間、考古学・地質学・土木工学の専門家の現地検分を願い、各々の立場からの指導・助言を賜った。

事前調査に際しては、後円部渡土堤から西渡土堤にかけての部分に一〇本、西渡土堤から東渡土堤にかけての部分、つまり前方部正面を中心に八本、後円部渡土堤、および後円部北東側外堤外法部の侵入防止柵設置部分に三本、計二一本のトレンチを設けて調査を進めた（第5図）。これらのトレンチの規模は墳丘部が長さ四～五メートル×幅二～四メートル×深さ約〇・五メートル、侵入防止柵設置部分が長さ四メートル×幅一メートル×深さ約一・二メートル二箇所と長さ二メートル×幅一メートル×深さ〇・七メートルである。

調査地における基本的な層序は比較的単純で、以下のとおりである。

Ⅰ層　表土。黒色の腐植土。旧表土を含む。

Ⅱ層　濠内の堆積土。有機物を含む黒色腐植土（Ⅱa）と、やや粗い